

Lingua-Lingua 記事選

中村雅之 著

2011年9月13日

古代文字資料館

目 次

はしがき	(2頁)
シャレード(charade)について	(3頁)
『Pygmalion』に見る英語階級方言	(6頁)
「deutsch」の語源とその周辺	(9頁)
『中級ドイツ語のしくみ』	(12頁)
『ジョン万次郎の英会話』	(12頁)
『西洋古典こぼればなし』	(13頁)
南朝四百八十寺	(13頁)
『英語教師 夏目漱石』	(14頁)
バルカン言語群と漢児言語	(14頁)
『数学ガール----フェルマーの最終定理』	(15頁)
『世界音声記号辞典』	(15頁)
『【対論】言語学が輝いていた時代』	(16頁)
『漢字伝来』	(16頁)
『話し言葉で読める「蘭学事始」』	(17頁)
古典ギリシア語	(18頁)
『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑・モンゴル語配列対照語彙』	(18頁)
『ラテン語の世界』	(19頁)
『ヴォイニッチ写本の謎』	(19頁)
「インチキ・ヒエログリフ」	(20頁)
朝鮮語の学習	(21頁)
朝鮮語の学習(続)	(22頁)
『英語史入門』	(22頁)
<i>A Dictionary of Modern Written Arabic</i>	(23頁)
『日本語の森を歩いて』	(23頁)
ラシード・ウッディーン?	(24頁)
『英文の読み方』	(24頁)
『高校英語を5日間でやり直す本』	(25頁)
<i>The Holy Bible 1611 Edition</i>	(25頁)
<i>The Sky Is Falling</i>	(25頁)
『多聴多読マガジン』創刊号	(26頁)
古英語の初歩	(26頁)
Kay & Jeff	(27頁)
<i>Painted Labyrinth</i>	(27頁)
『清代満洲語文法書三種』	(28頁)
『荻野のイッキに古典文法』	(28頁)
『シュメル---人類最古の文明』	(29頁)
『まんがパレスチナ問題』	(30頁)
Au Konbini	(30頁)
『中国文明の歴史』	(31頁)

はしがき

この雑文集は私のブログ「lingua-lingua」の中から、39篇の記事を選んでまとめたものである。「lingua-lingua」は2005年8月に開設したブログで、漢語音韻史の草稿や読書記録、語学番組の感想などを備忘録として書き連ねてきた。中には40代後半で三度めの学生生活を送った際の授業の感想やレポートなども含まれている。今回はその授業レポートと言語関連の読書記録を中心に記事を選んだ。配列は全くのランダムで、時期別、内容別などの再整理はしていない。なお、記事の末尾にはブログにアップした際の年月日を入れてある。

これらの記事は本来、公にするような内容ではない。しかし、最近ブログをほとんど更新する暇がなく、場合によっては閉鎖することも考えねばならない状況である。そうすると、これまで書いたものが全て消えてしまうことになるため、一部分ではあるが記事のバックアップとして古代文字資料館のPDF単刊に加えることにした。いささか公私混同の嫌いもあるが、枯れ木も山のにぎわいということで、古代文字資料館のサイトを楽しむ一助となれば幸いである。。

2011年9月13日

中村雅之

シャレード(charade)について

1. 三種類のシャレード

シャレード(charade)とは、いくつかのヒントによって言葉を当てる一種のなぞなぞである。本来はある単語を二つ以上に分割し、それぞれの部分ごとにヒントを出してゆくものであるが、いくつかの発展型を生じた。その形式には主に三種類ある。その一は、言葉によってヒントを出すもの(以下、便宜上「語りのシャレード」と称する)、その二は、19世紀に流行った大がかりな余興で、一幕一幕がヒントになった謎掛け芝居(以下、「演じるシャレード」)、その三は、声を出さずにジェスチャーだけで単語やフレーズを当てるもので、現在英語圏でシャレードと言えば通常これを意味する。第二のものは英語でacted charade、第三のものは、dumb charadeと称されることがある。

シャレードは初めフランスで生まれたもので、辞書などの記述によれば18世紀に英国に入ってきたものらしい。南仏のプロヴァンス語で「会話」を意味する「charra」を語源とするようである。Gay(1995)は、シャレードが英国に渡った年を1776年とするが、具体的な根拠を示していないため、真偽のほどは定かではない。(cf. Penny Gay, Emma and the Battle of Waterloo, *Sensibilities*, No.10, June 1995. web版 <http://www.jasa.net.au/jaebwpg.htm>)

2. 語りのシャレード

本家のフランスではシャレードと言えば今でも語りのシャレードを指す。これに対して英国では、とりわけヴィクトリア朝においては、圧倒的に演じるシャレードの方が普及した。『英国レディになる方法』(岩田託子・川端有子著、河出書房新社2004)の「シャレード」(34-35頁)の項には、「シャレードとはフランス由来の謎解き芝居」とのみ説明があり、語りのシャレードについては全く触れられていない。該書の趣旨が主にヴィクトリア朝の風俗を描くことにあることを考慮すれば、致し方ないとも言えるが、その次に「たとえば」として最初に挙げられている例が語りのシャレードであるのは読者を困惑させるであろう。

英文学に見られる語りのシャレードとしては、次節で紹介するジェイン・オースティンの小説『エマ』のものが有名であるが、比較のために、まずはフランス語のシャレードの形式を確認しておきたい。インターネット上の百科事典Wikipediaのフランス語版において、「Charade」の項に「古典的なシャレード(La charade classique)」として紹介されているのは、次のようなものである。(日本語訳は中村の試訳)

Mon premier est un animal. 私の第一部分は「動物」。

Mon second est une anse. 私の第二部分は「入り江」。

Mon tout est une devinette. 私の全体は「なぞなぞ」。(さて、私は何でしょう?)

答えは、第一部分が「chat(猫)」、第二部分が「rade(停泊地)」、そして合わせて「charade」となる。つまり、「charade」を「cha-rade」と二分割し、前半部分が「猫」を意味する「chat」と同音、後半部分が「rade(停泊地)」であることを利用している。この例のように、「私の第一は…/私の第二は…/私の全体は…」という形式を取る。もし、全体が三分割以上されていれば、「私の第三は…/私の第四は…」と続くことになる。英語のシャレードも全く同様の表現(「My first ---/ My second ---/ My whole---」)を取る。

なお、これらの表現を、岩田・川端(2004)におけるように「第一音節…/第二音節…」と理解するのは厳密に言えば正確ではない。フランス語においても英語においても、分割された部分は一音節ずつとは限らず、二音節以上の単位になることもしばしばあり得る(後述の『虚栄の市』の例を参照せよ)。したがって「第一部分…/第二部分…」というのが穏当な理解である。

3. 韻文形式のシャレード

上述のように、英国ヴィクトリア朝においては、シャレードと言えば通常は演じるシャレードを意味した。

このことは、この時期の小説において「charade」という語が「act」という動詞と共に用いられることから明らかである。しかし、より古い時期の作品には語りのシャレードを意味する例もあり、とりわけジェイン・オースティン(Jane Austen、1775-1817)の小説『エマ(Emma)』(1815)の第9章には二篇の語りのシャレードが具体的に(そして効果的に)描かれている。そのうちの最初のシャレードは次のようなものである。

My first doth affliction denote,
Which my second is destin'd to feel
And my whole is the best antidote
That affliction to soften and heal.—

これを岩波文庫本(工藤政司訳)は次のように訳している。

最初のシャレードは悩みを意味し
二番目はそれを感じる運命にあり
全てはこよなき解毒剤
悩みを和らげ癒すなり

むなしいほどに意味不明の訳である。試訳と解答は以下の通り。

私の前半部は苦悩を意味し(=woe)
私の後半部はそれを感じる運命にある(=man)
そして私の全体は最良の治療薬(=woman)
その苦悩を和らげ癒してくれる

ここでの「antidote」は韻を踏むために選ばれた語で、「remedy」の意であろう。女が男の苦悩を癒してくれるということ。最終行は押韻のために倒置されている。

『エマ』に見えるシャレードの特徴は韻文であることである。もっとも、ここに引いたシャレードは「あの有名なシャレード(that well-known charade)」として挙げられたものであるから、オースティン自身の作であるかどうかは分からない。しかし、『エマ』に出てくるもう一つのシャレードも一篇の詩になっており、他のオースティン作のシャレードも全て韻文である。これはフランスのシャレードには見られない特徴である。

英語版Wikipediaの「Riddle」の項には、1834年のアメリカの雑誌に載ったシャレードが紹介されている。

"My first, tho' water, cures no thirst,
My next alone has soul,
And when he lives upon my first,
He then is called my whole."

試訳と解答は以下の通り。

私の前半部は、「水」ではあるが喉の渇きを癒しはしない(=sea)
私の後半部は、それだけが「心」を持つ(=man)
そして「私の前半部」で暮らしを立てれば
その人は「私の全体」と呼ばれることになる(=seaman)

ここでもしっかりと韻を踏んでおり、英語で作られる語りのシャレードは、少なくともヴィクトリア朝より前の時代には、ほとんどが韻文であったことが想像される。

これとの対比で興味を引くのが、ロシア生まれの作家ナボコフ(Vladimir Nabokov、1899-1977)の小説『絶望(Отчаяние、1932、英語版Despair、1965)』に見えるシャレードである。ロシアの上流家庭に生まれ、trilingual(英仏露)であったというナボコフはロシア語と英語で多くの作品を残しているが、初めロシア語で、後には英語で書かれた小説『絶望』の第三章にシャレードが一つ使われている。英語版によれば、不振のチョコレート会社を営む主人公が、ある夜、街灯の柱をステッキで叩く音(「Chock」)を聞いて作ったシャレードである。

my first is that sound,
my second is an exclamation,
my third will be prefixed to me when I'm no more;
and my whole is my ruin.

ウェブサイト「ナボコフノート」による日本語訳と解答は以下の通り。

第一に私はあの音 (=Chock)
第二に私は悲嘆の叫び (=O)
第三に私はこの世から消えたときの私に冠される語 (=Late)
そしてまとめて私の破滅 (=Chocolate)

20世紀の英語の小説でフランス式の語りのシャレードが用いられるのは珍しいが、これはもともとロシア語であるということ、そしてナボコフがフランス語に堪能であったことと無関係ではない。彼の別の小説『賜物』(原文ロシア語)には語りのシャレードがフランス語のまま用いられているという。(cf. website「ナボコフノート」<http://sirin-n.hp.infoseek.co.jp/index.htm>)

4. 演じるシャレード

すでに述べたように、ヴィクトリア朝に入ると語りのシャレードは廃れ、演じるシャレードが流行する。小説の中では、岩田・川端(2004)に紹介されているように、サッカリー(William Makepeace Thackeray, 1811 - 1863)の『虚栄の市(Vanity Fair)』(1847-1848)とシャーロット・ブロンテ(Charlotte Bronte, 1816 - 1855)の『ジェイン・エア(Jane Eyre)』(1847)にシャレードを演じる場面が描かれている。ここでは前者を紹介しておく。

『虚栄の市』の第51章は、その章のタイトルがすでに「Chapter LI: In Which a Charade Is Acted Which May or May Not Puzzle the Reader」とあって、演じるシャレードがテーマになっている。ここでのシャレードはかなり大がかりな芝居である。二つのシャレードが描かれるが、その最初のは、第一幕ではトルコの大官「Aga」、第二幕ではエジプトの巨大な像「Memnon」、第三幕ではシャレードの答えでもあるギリシア神話の王「Agamemnon」が演じられている。第一幕の最後では「First two syllables」と叫ぶ声上がり、シャレードの前半部が二音節であることが示される。同様に第二幕の最後では「Last two syllables」という声があり、後半部も二音節であると知れることになる。

なお、この章の中に「At this time the amiable amusement of acting charades had come among us from France」という記述がある。この小説は1810年頃を背景としているから、この記述が正しいならば、「演じるシャレード」は19世紀になってから英国に入ってきたことになる。そしてそのことは19世紀初頭以前に、演じるシャレードの記述が見当たらないこととも符合する。

5. まとめ

英国のシャレードは、まず18世紀後半(?)に「語りのシャレード」がフランスから伝わり、ゲームと言うより詩の形式で広まった(好例は『エマ』に見える)。次に19世紀初めに「演じるシャレード」がやはりフランスから伝わり流行した(『虚栄の市』『ジェイン・エア』)。20世紀にはジェスチャー・ゲームへと変貌した。

(2006/07/15)

『Pygmalion』に見る英語階級方言

1. コクニー方言

バーナード・ショー(George Bernard Shaw)の戯曲『Pygmalion』には英語の階級方言の特徴が直接的かつ効果的に描かれている。ロンドン東部の労働者階級の言語(いわゆるコクニー方言)を話すイライザが、音声学者であるヒギンズ教授の指導により上流階級の話すような英語を会得するというのが、この作品の重要なプロットである。ショーはイライザの発音を、通常とは違う綴りによって巧みに表現しているが、コクニー方言に慣れないものにとっては些か判読しがたい部分もある。この綴りが最も集中的に現れるのは次の箇所である(Penguin Classics版11頁)。

Ow, eez, yə-ooa san, is e ? Wal, fewd dan y' d-ooty bawmz a mather should, eed now
bettern to spawl a pore gel's flahrzn than ran awy athaht pyin. Will yə-oo py me f'them ?

中尾・寺島(1988:142頁)にはこの部分の標準英語訳があり、次のようになっている。

Oh, he's your son, is he ? Well, if you'd done your duty by him as a mother should, he'd
know better than to spoil a poor girl's flowers and then run away without paying. Will
you pay me for them ?

コクニー方言の発音面での最も顕著な特徴は、語頭のhを発音しないことと、/ei/ が /ai/ のように発音されることであるが、上の引用箇所にもそれらの特徴が表れている。すなわち以下のような対応にある。左が標準的な綴りと発音、右がショーの表記と表そうとした音声である。

he's /hi:z/ → eez /i:z/

pay /pei/ → py /pai/

このほか、本来のコクニー方言にはthが /f/ や /v/ になる特徴もあるが、ショーの表記にはこの特徴は見えない。おそらく、文字化した場合にあまりにも分かりにくくなるために取り入れなかったのであろう。実際、イライザの台詞も全てが上のような表記で書かれている訳ではなく、冒頭のシーンを除けば、ほとんどは通常の綴りになっている。もしも全てを忠実に文字化しようとするれば、読者(あるいは演ずる役者)に必要以上の混乱を招くであろうことは想像に難くない。

文法面では動詞が1人称や2人称においても3人称形になるという特徴がある。第1幕で、イライザの近くに居合わせた見物人(the bystander)が「She thought you was a copper's nark, sir.」という台詞(Penguin Classics版13頁)を口にすが、ここでの「was」がそれである。

このほか、語彙面での特徴として脚韻俗語と称されるものがある。脚韻を利用して語を言い換えるもので、中尾(1989:38頁)には、「my wife」という代わりに「my war and strife」と言ったり、「flowers」の代わりに「April showers」と言うような例が挙げられている。このような脚韻俗語は『Pygmalion』には用いられていない。20歳頃にロンドンに移り住んだショーにとっては、自在に使えるものとは言えなかったであらうし、観客に分かりにくいという点でも戯曲には書きにくいものであったかも知れない。

2. 標準英語と階級方言

中尾(1989:39-40頁)および荒木・宇賀治(1992:3-18頁)によれば、標準英語というものが英国全土に広まるのは15世紀以降であるという。1476年にカクストンによる印刷が普及したことが最大の契機となった。英語はすでに14世紀には、フランス語に代わって学校教育や公文書に用いられていたが、印刷物の普及によって標準的な英語が広く行きわたることになった。しかし、これは文章語としての英語であって、標準口語英語はそれよりもやや遅れて18世紀以降に広まることになる。

口語としての標準英語成立の背景をなすのは、教育制度の充実である。17世紀以前には庶民の子弟に読み書きを教える公的機関は皆無であったが、18世紀になると富裕層から寄付金を募って各地にチ

ヤリティ・スクールが設立されるようになった。1850年にはその数は数千に達したという。19世紀後半には全ての子供に初等教育を受けさせる法律が制定され、女子の高等教育も充実してくるなど、標準英語が音声を伴って広がる環境が整うことになった。標準口語英語発達のもう一つの契機は18世紀に出版された3種の発音辞典と多数の文法書である。これらに記述された規範的な英語が教育の場を通じて標準英語として認知されていった。

標準英語の源は宮廷や上流階級の洗練された言語であるから、標準英語そのものが階級的な性格を帯びていた。したがって、標準英語の成立と広がりには、一面では、標準英語と異なる特徴をもった方言（とりわけ労働者階級の言語）への評価を相対的におとしめる可能性を含んでいた。したがって『Pygmalion』において、洗練された言語を獲得したイライザがもとの生活に戻れないと感じたのは、言語と階級とが直結する環境にあった当時においては、ごく通常の間接的感覚と言える。

3. 『Pygmalion』における各登場人物の英語

イライザとその父親は、登場時点では典型的なコクニー方言の話し手である。イライザは訓練を受けた後では洗練された言語の話し手になるが、ヒギンズとの会話で興奮すると時々以前の訛りが顔を出す。父親の方も、金持ちになって現れてからは、語彙面でやや丁寧な言葉遣いになるものの、イライザに比べると標準的ではない言い回しも多い。

最も標準的な言葉遣いで話しているのは、ヒギンズ夫人とピカリング、そしてクララとフレディの母親であるアインスフォード・ヒル夫人の3人である。ヒギンズ教授は、発音と文法は正しいが、ののしり言葉が多く上品とは言い難い言葉の話し手として描かれる。

興味深いのはクララとフレディである。母親が極めて上品な発音であるのに対して、クララはややカジュアルな発音、フレディに至ってはイライザと大差ない発音である。3人がヒギンズ夫人宅を訪れた際の挨拶言葉を比較すると、違いは一目瞭然である。

母親： How do you do ?

クララ： How d'you do ?

フレディ： Ahdedo ?

この一家は、階級的には中流でありながら、経済的にやや苦しい状況にあるため、2人の子供は中等教育(secondary education)を受けていない。標準英語は主にパブリック・スクールや大学で培われるため、初等教育しか受けていない2人は標準英語を十分に習得していないのである。とりわけフレディの言葉は全く教養を感じさせないものであり、大卒ではイライザのコクニー方言とほぼ同質のものと言ってよい。

もう一つ興味を引くのは家政婦(housekeeper)のミス・ピアスである。ホーン(2005: 79頁)によれば、家政婦を置くのは大規模の家庭であって、小規模の(すなわち使用人の少ない)家庭では家政婦はいなかった。したがって、ヒギンズ家には家政婦以外にも多くの女中がいたと考えてよい。その使用人規模も、大学教授という職業も、上位中流階級(upper middle class)にふさわしいものであろう。そのような家庭で多くの女中の上に立つミス・ピアスが、時にヒギンズ教授の言葉遣いをたしなめるほどに、きちんとした英語を話しているのは当然と言えるかも知れない。しかし、小間使(lady's maid)と女家庭教師(governess)のほとんどが困窮した中流階級の出身である以外、女中は通常労働者階級の出身であったから、家政婦であるミス・ピアスも当然労働者階級出身と考えねばならない。当時存在したロンドンの家事奉公人学校では13歳から15歳の2年間にわたる訓練があったが、カリキュラムの3分の1は読書・歴史などの一般教養にあてられたという(ホーン2005: 58-59頁)。ミス・ピアスのように家政婦を務めるような女性たちの中には、初等教育に加えてこのような学校で教育を受けた者もいたのであろう。そのような場所において、標準的かつ教養ある英語が育まれたものと考えられる。

4. 『Pygmalion』と“標準英語”の時代

ショーが『Pygmalion』で描いたのは、洗練された知識人たちの英語と、無教養な労働者階級の英語の対比であった。そのような対比を成立させているのは、19世紀に急速に広まった“標準英語”という概念である。18世紀以来の多数の文法書や発音辞典が、かくあるべしという規範としての英語を記述し、その手本を上流階級の英語に求めた。その発音は「容認発音(Received Pronunciation)」と称される。そのような規範としての標準英語が厳然と存在し、コクニー方言に代表される労働者階級の言語が無教養なものと思なされたのが、19世紀後半から20世紀前半であった。

20世紀後半に入ると、そのような標準英語は次第に変容しはじめた。コクニー方言と発音面で多くの共通性をもつ河口域英語(Estuary English)が若い世代を中心に大きな勢力になってきた。河口域英語はテムズ河流域を中心にイングランド南東部に広く話されている一種の共通語というべきもので、大まかに定義すれば、標準英語の語彙と文法に、イングランド南東部の発音特徴を加えたものと言える。

ロンドン近郊のLeytonstone出身のサッカー選手ベッカムの話す英語(think を /fink/ と発音する)が、若い世代にはカッコイイ英語として捉えられているのも、河口域英語が広まっているという現象の一部として考えるべきであろう。もともと、河口域英語ではこの th→ f の特徴を持たないとされているので、ベッカムの英語は河口域英語というよりも、イングランド南東部方言という方が適切かも知れない。また、BBC放送の英語も、かつては容認発音の見本とされたが、最近では必ずしも容認発音によらない英語が放送されることも少なくない。

要するに、上流階級の発音を手本とした標準英語が尊ばれ、それと対比をなすコクニー方言が無教養な英語とされたのは19世紀後半から20世紀前半にかけての一時期に限られるのであり、『Pygmalion』はまさにそのような時代の産物であったと言えるのである。

<参考文献>

荒木一雄・宇賀治正朋(1992)『英語史ⅢA』(英語学大系10)、大修館書店。

中尾俊夫・寺島廸子(1988)『図説英語史入門』、大修館書店。

中尾俊夫(1989)『英語の歴史』(講談社現代新書958)、講談社。

パメラ・ホーン(2005)『ヴィクトリアン・サーヴァントー階下の世界ー』子安雅博訳、英宝社。

(2005/09/09)

「deutsch」の語源とその周辺

1. 「deutsch」の語源

「deutsch」という語が元来「民衆(の)」を意味する語であったことについては概ね明らかにされている。しかし、細部においては不明瞭な部分があり、またドイツ語の専門家においてもしばしば誤解があるようである。

渡辺格司『ドイツ語語源漫筆』(大学書林、1963)の「deutsch」の項には次のような説明がある。(下線は引用者)

(…前略…)これに反して起源の明瞭なのは **deutsch** である。その意味するところは **volksmäßig, volkstümlich, völkisch** なのである。八世紀末の文書に見られる **theodisca lingua** がドイツ語という句の最古の物だと **Kluge** が言っているが、当時はまだドイツ民族は自己を **theodiscus** と呼んだのではなく、それぞれの種族が **Sachsen, Friesen, Franken** などと各自に呼んでいたのである。しかしこの **theodiscus** から由来した **ahd.diot, mhd.diet** が『民族』の意味となり、『わしが國さ』というなつかしい調子を含んだ **deutsch** という語となったのである。この語から派生して低地ドイツ語では **dütsch** と言い、英語では **dutch** となってゲルマン民族の一部なるオランダ人を指している。(…後略…)

この説明ではラテン語の「**theodiscus**」から古高ドイツ語の「**diot**」が生まれたように読めるが、誤解であろう。上に言及された **Kluge** のドイツ語語源辞典 (*Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*) にもそのような記述はない。

Kluge 辞書の「**deutsch**」の項には、「**Volk**(民衆)」を意味する古高ドイツ語の「**diot**」やゴート語の「**þiuda**」、古英語の「**þeod**」などは、ゲルマン祖語の「***þeudō**」に、さらには印欧祖語の「***teuta**」に遡ると記されている。古高ドイツ語における形容詞形「**diutisc**」は「民衆語の／民衆語で」の意味を持っており、それをラテン語式に表したのが「**theodisce /theodisca lingua**」であるという。つまり、ラテン語の「**theodisce /theodisca**」は、古高ドイツ語「**diutisc**」をラテン語風に変換した語形 (*latinisierte Form*) だというわけである。

Kluge の辞書には、「**theodisce /theodisca**」の実際の用例あるいは文献については言及がない。ただフランク王国においてそのようなラテン語表現があったと記すのみである。この点に関して寺澤芳雄『英語語源辞典』(研究社、1997)の「**Dutch**」の項には、もう少し具体的な記述がある。(下線は引用者)

(…前略…)形容詞は、8Cに **St. Boniface (Wynfrith)**の下にドイツで伝導した英国人たちが **L vulgāris** の訳語として用いたもので(cf. **Theodisca lingua**, c788), もとはラテン語に対して一般的に「民衆の話す卑俗な言葉」、さらにはゲルマン語系の「**自国語**」を表した。それがやがて「**ドイツ語**」へと限定され、「**ドイツ語を話す人々**」へと拡大して、12-13Cには国名として **Duitisklant (=G Deutshland)** が生じるに至った。(…後略…)

これによれば、ラテン語形「**theodisca**」を創作したのはドイツ人ではなく英国人伝道師たちであったということになる。確かに、古高ドイツ語「**diutisc**」よりは、古英語「**þeodisc**」の方がラテン語形にずっと近い。綴りの対応から見れば、「**theodisca**」というラテン語は、当時の英語(=古英語)の語形から英国人たちが創作したものとするのが穏当である。

ところで、上の説明中、「**theodisca (lingua)**」という形容詞がラテン語で「民衆(語)の」を意味する「**vulgāris**」の「訳語」であると述べているのは不思議な印象を与える。ラテン語で記すのに、なぜ(ラテン語からラテン語への?) 新たな「訳語」が必要なのか。これについては次のように考えられる。「**vulgāris**」を用いると、正規のラテン語に対する(同系の) 俗語であるイタリア語などを表す可能性が高く、ドイツ語などのゲルマン語を表すのに適切ではない。そこで「**ゲルマン語**」を表すのに、ゲルマン語で「**民衆語**」を意味していた語からの転用を思いついたのである。つまり、「**theodisca lingua**」という表現は語源から見れば

「民衆語」であるが、実際の使用においては汎用的な「民衆語」ではなく、あくまでも「ゲルマン語」を意図した表現だということになる。したがって、寺澤(1997)が「theodisca」を「vulgāris」からの「訳語」と表現したのは適切ではなく、正確には、「vulgāris」に対応するゲルマン語から新たに考案したラテン語が「theodisca」であったというべきであろう。

ドイツ語「deutsch」や英語「Dutch」の語源については概ね以上であるが、「theodisca」等の実際の用例については、上記の語源辞典からは得ることができない。そこでインターネット上で検索してみると、次のようなものが見つかった。(下線は引用者)

Ausdruck *theudisk ist zuerst in latinisierter Form in Quellen des späten 8. Jahrhunderts belegt: Erstmals erscheint theodiscus in einem Bericht über zwei englische Synoden im Jahr 786, den der päpstliche Nuntius Georg von Ostia an Papst Hadrian I. schrieb. Georg teilt darin mit, dass die Beschlüsse der ersten Synode auf der zweiten verlesen wurden tam latine quam theodisce, quo omnes intellegere potuissent (»sowohl lateinisch wie auch in der Volkssprache, damit alle es verstehen könnten«).(Klein, Mittelalter Lehrbuch Germanistik <https://www.metzlerverlag.de/buecher/leseproben/978-3-476-01968-4.pdf>)

これによれば、786年のイギリスの司教会議の報告書に、「[会議の決定は]すべての人が理解できるように、ラテン語でも民衆語でも (tam latine quam theodisce, quo omnes intellegere potuissent) 読み上げられた」とあるのが、ラテン語「theodisc-」の最古の用例であるらしい。「theodisce(民衆語で)」は「latine(ラテン語で)」と対をなして副詞として用いられているが、この場合の「theodisce」は当然、当時のイギリスの言語すなわち古英語を指すことになる。以下に引用するオンライン語源辞典の説明も同様である。(下線は引用者)

As a language name, first recorded as L. theodisce, 786 C.E. in correspondence between Charlemagne's court and the Pope, in reference to a synodical conference in Mercia; thus it refers to Old English. First reference to the German language (as opposed to a Germanic one) is two years later. The sense was extended from the language to the people who spoke it (in Ger., Diutisklant, ancestor of Deutschland, was in use by 13c.). ("Dutch." Online Etymology Dictionary. <http://dictionary.reference.com/browse/Dutch>)

興味深いことに、ドイツ語の語源辞典ではラテン語形「theodisce / theodisca」の起源を古高ドイツ語と関連づけることが多く、古英語との関連については多くを述べないが、一方、寺澤(1997)や上に挙げた Online Etymology Dictionary のような英語系の語源辞典では、ラテン語の表現「theodisce / theodisca」などが英国人によって作られたこと、さらに786年の初出例ではその語の指し示す所が「古高ドイツ語」ではなく、「古英語」であることを積極的に記している。

いずれにせよ、8世紀後半が「theodisce / theodisca」の初出ということになり、この時期にはすでに古英語の「þeodisc」や古高ドイツ語の「diutisc」が自分たちの言語すなわち(英語やドイツ語など)ゲルマン語の意味で用いられていたことは明らかである。しかし、英語ではその語は消え(オランダ語を示す Dutch に変容した)、ドイツでは「deutsch」として残った。地方ごとの独立意識が強かったドイツでは、個別の地方名に結びつかないこの語を言語の名称とするのが便利であったためであろう。

2. 「deuten」「deutlich」との関連

下宮忠雄『ドイツ語語源小辞典』(同学社、1992)の「deutlich」の項には「原義:民衆(古dīot)にもわかるような。deuten(民衆にわからせる→知らせる、解釈する)に対する形容詞。Deutschと同源語。」という説明がある。一方、渡辺格司『ドイツ語語源漫筆』(大学書林、1963)には以下のような説明があり、ニュアンスはやや異なる。

(…前略…)deuten (解釈する)は deutsch をもって、したがって自国語をもって、一般にわかりやす

く、述べるというところからきたのであって、古くは学者がラテン語を日用語に用い、庶民にはわかり難かった事もあわせ考えられる。bedeuten, bedeutend, Be-deutung, andeuten, deutelnなどはこれから派生したものであるが、なかでも deutlich (明瞭な)は deuten の原意から派生したものであって、
Rede deutscher! (Schiller, Räuber, IV.5)

は Rede deutlicher! の意味であることも、先に述べた説明から異論はないであろう

解釈としては後者の方が妥当であるように思われる。つまり、deuten の原意は下宮(1992)のような「民衆にわからせる」ではなく、渡辺(1963)の説くように「民衆語(=ドイツ語)で述べる」であろう。「deuten」の古高ドイツ語および中高ドイツ語での語形は「diuten」または「tiuten」であるが、もともとは難解なラテン語を自分たちの「diutisc(民衆語)」で説明することが「diuten」であったと考えられる。Kluge 語源辞典の「deuten」の項の説明の中に、古英語の「geþeodan」が「翻訳する」の意味だという記述があるが、この古英語もラテン語から民衆語(=英語)への翻訳が原意と考えてよからう。

伊東泰治他編『中高ドイツ語小辞典』(同学社、1991)には、「diuten」と関連のありそうな語として「diutære, tiuære」(解説者、注釈者)と「diute, tiute」(解釈、意味解き)が挙げられている。これらの語も、「ラテン語の解釈」が原意であったことを想像させる。

ラテン語形「theodisce」の初出例に「tam latine quam theodisce」とあるように、「theodisce」(およびその基づくゲルマン語形)が「ラテン語」と対比する表現であったことは象徴的である。古高ドイツ語の「diutisc」も古英語の「þeodisc」も、原意は「民衆(語)の」であるにせよ、8世紀には「難解なラテン語に対する平易なゲルマン語」という意を含んでいた訳である。政治的な境界を越えてゲルマン系の民族が共有する言語の名が、「deutsch(<diutisc)」として定着したのも、その語に付随する「平易な日常語」というニュアンスの故であったかも知れない。

(2010/09/28)

『中級ドイツ語のしくみ』

清野智昭著『中級ドイツ語のしくみ』(白水社、2008年9月20日発行)。ドイツ語学習の初級を終えた人に、中級への橋渡しとしての文法を丁寧な説明した書である。とはいってもいわゆる文法書の体裁ではなく、項目ごとに2頁読み切りのエッセー風である。私はNHKラジオ講座の頃からの清野氏のファンで、特にその言語学的なセンス、そして難解な事項を分かりやすく説明する技術に注目していた。本書は清野氏の技量を遺憾なく発揮したものと言ってよい。エッセー風とはいえ、結構内容が濃いので、購入してから一年半の間、通勤電車でポツリポツリと拾い読みしている。語順やnichtの位置に関する部分をもっと読み応えがあるが、時制や法に関する部分も面白い。

体験話法という項目があって、へえドイツ語にもあるのかと思った。ドイツ語で言う体験話法(erlebte Rede)はフランス語の自由間接話法(discours indirect libre)や英語の描出話法(represented speech)と同じものらしいが、英語の高校生向け文法書などではまず説明がない。直接話法と間接話法の間間的なこの話法は日本語に訳す時にも悩む文体の一つだろう。この話法を一言で説明するのは難しいが、間接話法の従属節を独立させて、3人称主語を立てるにもかかわらず、1人称的な視点から表現する話法である。昔、仏文の学生だった頃に、フローベールの『ボヴァリー夫人』を読まされて、この自由間接話法が頻出するのに苦しんだ記憶がある。一般に、この話法は会話や新聞などで用いられるものではないが、小説などでは結構出てくる。本書ではトーマス・マンの『トニオ・クレイガー』の一節を引用している。

(2010/05/28)

『ジョン万次郎の英会話』

乾隆著『ジョン万次郎の英会話』(リサーチ出版、2010年2月2日発行)。書店で立ち読み、というか熟読してしまった。本書には「英米対話捷徑 復刻版・現代版」と副題が付されている通り、ジョン万次郎こと中浜万次郎の手になる英会話教本『英米対話捷徑』(1859年)の写真版とそれを現代風に見やすく翻刻した部分からなる。さらに巻頭には万次郎の生涯と、その英語力などについての要を得た解説が付されている。

『英米対話捷徑』は約200の日常表現からなり、英語本文の右にカタカナで発音、ひらがなで逐語訳を並べたものである。中国明代の対音対訳資料である各種「華夷訳語」を彷彿とさせる作りであるが、逐語訳の部分に漢文風の返り点が付いている点が日本風であって、歌の文句ではないが「いとしさと、せつなさと、心強さ」を感じさせるのである。「you」に対する訳語が「あなた」であったり「おまえ」であったり、時に「おまん」であったりするから、万次郎自身が一挙に書き下ろした教本というより、弟子(?)が折々に聞き書きした資料をまとめたのであろう。

巻頭の解説で面白かったのは、万次郎が伝えた英語のカタカナ表記は本書以外にも多く知られているが、それらは万次郎が書いたものではなく、取り調べをした役人たちが記したものだという指摘である。そしてそのような表記を逆に、万次郎が参考にしたのではないかという。14歳で漂流し、アメリカで教育を受けた万次郎は、日本では寺子屋にも通ったことがなかった。したがって、帰国してから相当の努力で日本語の読み書きを修得したと思われるが、「good」を「グーリ」とするような英語のカタカナ表記も、そのような学習の結果であったかも知れない。

万次郎の生涯については、中浜博氏や中浜武彦氏など、万次郎の子孫たちによる詳細な記述があるが、本邦初の英会話教本が本書によって手軽に見られるようになったのは何とも嬉しい。

(2010/02/25)

『西洋古典こぼればなし』

柳沼重剛著『西洋古典こぼればなし』(岩波書店、同時代ライブラリー、1995年10月16日発行)。10年以上前に購入して、ざっと目を通しただけで放っておいたのだが、最近また読み返してみた。著者の柳沼氏は西洋古典語の専門家で、京大文学部で田中美知太郎や松平千秋に師事し、東大大学院で高津春繁の教えを受けた人であるが、昨年なくなっている。タイトルの通り、西洋古典に関わるエッセー集だが、誰もがふと感じる小さな語学的疑問を追いかけて、綴っている。たとえば、「音読と黙読」という一文では、古典がいつ音読から黙読に変わったかという問題を論じているが、西洋の伝統を述べつつ、文字で記すことの本質をも視野に入れた興味深い論考である。

「ENTER SHYLOCK など」においては、英文で書かれた芝居のト書きで、「誰々登場」という時の表現を問題にしている。「シャイロック登場」ならば、「Enter Shylock」という訳だが、この「enter」はどうして「enters」ではないのかという事である。これはト書きをラテン語で書いていた時代の名残で、接続法(希求法)が用いられているのだそう。しかしまた「誰々退場」には、今なおラテン語で(しかも今では直説法で)「exit(単数)、exeunt(複数)」が用いられており、直説法になる理由はよく分からないらしい。

ほかに、ラテン語版『クマのプーさん』の話題などもある。これは、訳者 Alexander Lenard がはじめ1958年にブラジルのサン・パウロから私家版として出したのを、1961年にイギリスの老舗 Methuen が公刊したものらしい。タイトルは「Winnie ille Pu」となっている。私も1991年の Penguin Books 版を持っているが、これは2002年に昔の教え子から、気晴らしに(?)ラテン語でも読みましようと言って送られたものである。柳沼氏によれば、ラテン語訳は非常にすぐれたものであるが、英語原文のとぼけた味は薄れているということである。氏によれば、ラテン語は明晰な言語だが、とぼけた表現だけは不得手なのだそう。

このエッセー集を読んでいると、またラテン語やギリシア語をやりたくなってしまう。なかなかそんな時間はないのだが。

(2009/12/22)

南朝四百八十寺

「江南春」などのタイトルでよく知られている杜牧(803-852)の詩の第三句が「南朝四百八十寺」である。日本では伝統的に「ナンチョウ シヒャク ハッシンジ」と読まれている。最近、松枝茂夫編『中国名詩選』(岩波文庫)でこの詩の解説を読んでいると、ギョツとした。〈四百八十寺〉の五字が「みな仄声(去・入・入・入・去)で、sied-pak-puät-ziöp-diog という風になり、甚だ発音しにくい」と記されていた。問題は、示された音価である。9世紀の詩にもかかわらず、なぜか上古音が！！

事実は小説よりも……とはこのことか。藤堂明保氏の『学研漢和大辞典』(学習研究社)には、各々の親字の下に中国語の上古音・中古音・近世音が記されているが、その中古音を引用するはずが、誤って上古音を引用してしまったのである。しかし、執筆者も編集者もそれに気付かずに出版され、今も版を重ねているというのはどういうことだろう。怪しげな自費出版ならともかく、天下の岩波文庫にして、このようなことがあるのだなあ。まあ、それだけ中国語の音韻史というのは近寄りにくいのかも知れない。

ところで、上の『中国名詩選』の解説の意図は、仄声が続き過ぎてみっともないので、古来「四百八十寺」の「十」を入声でなく平声で読む習慣があり、日本でもそれゆえ「シヒャク ハチジュウジ」ではなく「ハッシンジ」と読むのだという点にある。もっとも平仄などというのは絶対的な規則ではないので、この詩でも

無理に平声で読む必要はないと、小川環樹氏は述べている。氏の「南朝四百八十寺」の読み方について(『中国語学研究』所収、もと1961)はこの問題を論じたもので、音声の逆進同化などにも触れて、非常に面白い論文である。

せっかくなので、詩の全文を挙げておこう。

千里鶯啼緑映紅
水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺
多少樓台煙雨中

(2009/05/15)

『英語教師 夏目漱石』

川島幸希著『英語教師 夏目漱石』(新潮選書、2000年4月25日発行)。8年前に購入した本だが、通勤電車の中で読み返してみた。漱石と英語の関わりを知るには絶好の書であることを再確認。興味深いのは、漱石が英語教師の道を歩み始めた明治20年代において、すでに漱石や新渡戸稲造らが英語を学んだ頃に比べて、生徒の英語の実力が格段に低下していたこと、そして漱石はそれをある意味で望ましいと考えていたことである。つまり、漱石や新渡戸は単に英語を学んだだけでなく、他の教科も「英語で」学んだのである。後の世代は英語ではなく日本語によって授業を受け、知識を得たわけであるから、それはそれで正常な方向へと進んだことになる。教師としての漱石は、知識の獲得に必ずしも英語を必要としない生徒に対していかに英語を教えるかという点に苦心し、自分なりの方法を試したようである。つまり、問題点は現代と全く変わらない。長年英語をやっても読めるだけで話せない(あるいは読めないし話せない)という言いがかりじみた批判にどう答えるか、今も昔も英語教師の悩みの種だろう。

それにしても、まだ落第生だった頃に書かれた彼の英語の作文が、現代の水準から見て、かなりいい出来であるのを見る時、明治初期の英語教育の凄まじさを痛感する。

(2008/11/24)

バルカン言語群と漢児言語

最近友人から中島由美著『バルカンをフィールドワークする』(大修館、1997年6月20日発行)という本を借りて読んだ。この本の存在は以前から知っていたし、中島氏に関する人となりも人を介して聞き及んでいたが、これほど面白い文章を書く人とは思わなかった。本書自体がすでに10年以上前のものであり、また語られる内容が主に1980年前後のことであるにもかかわらず、読み始めたら止まらなくなるほど魅力的な内容である。セルビアとマケドニアの人と言語を中心に語られるが、かの地の人々への興味からでも、もちろん言語的な興味からでも楽しく読める。

バルカン半島の言語群がその系統の違いに関係なしに、共通の特徴を有していることはよく知られている。私もそういう現象があることは漠然と知ってはいたが、具体的なことは何も知らなかった。マケドニア語がスラブ語に属するにもかかわらず、名詞の格変化をほぼ失っているとか、後置冠詞などというものを発達させているなど、改めてへーッと思った。私の興味を引いたのは、そのようなバルカニズムの生成要

因である。本書によれば、オスマントルコ時代を通じて、トルコ語の影響を蒙った結果と考えるのが妥当らしい。

私の連想は東アジアへ飛ぶ。12世紀から14世紀に顕著になる北方中国語のアルタイ化である。『老乞大』などの資料によって「漢兒言語」として知られるその言語は、SOV語順を容認し、後置詞を頻繁に用いる点で、契丹語・女真語・モンゴル語などのいわゆるアルタイ諸語の影響を受けたと考えられている。東欧のバルカン半島の言語群は、もともとの屈折語としての特徴を失って、孤立語的あるいは膠着語的な色合いを帯び、一方、東アジアの中国北方の地では、孤立語から膠着語へと近づいた。そのいずれにも、アルタイ語が政治的背景をもって影響を与えたのである。その昔、孤立語＞膠着語＞屈折語という順序で言語が発達したと主張した学者もいた由であるが、事実はかなり異なる。「英語」「バルカン言語群」「漢兒言語」などが蒙ったダイナミックな言語変化を例に考えれば、屈折語＞孤立語＞膠着語という変化が最も起こりやすいと言えそうである。もっともこれは、政治的な影響力を背景とした言語接触においてのみあり得る変化というべきであろうが。

(2008/10/07)

『数学ガール----フェルマーの最終定理』

結城浩著『数学ガール---フェルマーの最終定理』(ソフトバンククリエイティブ、2008年7月30日発行)。本屋で夢中になって立ち読みしてしまった。昨年出た『数学ガール』の続編らしいが、前著は読んでいない。高校生を主人公とした小説風の構成でありながら、数学を真面目に勉強してしまうという、おもしろいと言いたくなる書である。

高校2年生の<僕>が、中学2年生の従妹<ユーリ>に数論の基本を教えながら数学の面白さを示してくれるところから始まり、<僕>と同級生で数学の天才<ミルカ>や、1年後輩の<テトラちゃん>などと共に数学の深淵な世界に踏み込んでゆく。フェルマーの最終定理がいかんにして証明されたかが、我々にも分かるかも、と思わせてくれる。(そこまで行くのはかなりしんどいが)

小説的な構成で読者の心理的なバリアーを除きつつ、難しい話題に踏み込んでゆくという手法は、10年前にも『無限論の教室』(矢野茂樹著、講談社現代新書、1998年)で経験していて、その時にも感心した記憶がある。古代言語の文字や音韻に関する分野でもこの手の本があるといいのだけれど。

(2008/08/20)

『世界音声記号辞典』

ジェフリー・K・プラム&ウィリアム・A・ラデュサー著『世界音声記号辞典』(土田滋・福井玲・中川裕訳、三省堂、2003年5月12日発行)。読んで楽しい音声記号の辞典である。20世紀末にIPAの大幅改訂がなされてから、古い書物と新しい書物で表記法が異なったり、各国、各分野によって様々な習慣があったりして、とまどうことが多かった。知人から本書を紹介してもらい、感心したり納得したりして読んでいる。

言語音には関心はあるが、音声学にはさして興味がない私にとっては、むしろ各種の記号が研究者によって違う意味に使われているという事実の方が断然面白い。イタリア語の「g」やスペイン語の「ll」の

発音は、現在では通常小文字の「y」を180度回転させた記号で示されるが、少し前までは[ɥ]が使われていた(ちょうど左右が反転した格好になる)。その「ɥ」はアメリカではIPAの[ɖl]を表す記号として使われるという。

本書の特徴は、それぞれの記号の名称が与えられていることで、「y」を回転させた上記の記号は「逆さのy(turned y)」と呼ばれている。英語の「ng」を表す記号[ŋ]は、よく用いられる「エング(eng)」のほか「アンマ(angma)」という名称もあるらしい。

さらに感心したのは、著者の紹介欄に、原著者たちの発音がIPAで示されていたことだ。欧米人の名前の正しい読みは意外と分かりにくい。特に英語圏の名前は同じ綴りでも読みが異なる場合も少なくない。本書の場合、訳者の一人がわざわざ原著者にe-mailで確認したということである。音声記号をテーマにした書物ならではの試みだが、できれば他の書物にもこの方式が広がってほしい……むりかなあ。

(2008/07/23)

『【対論】言語学が輝いていた時代』

田中克彦・鈴木孝夫『【対論】言語学が輝いていた時代』(岩波書店、2008年1月29日発行)。個性の異なる二人の言語学者の対談。それぞれの言語学的経歴に触れつつ、半世紀来の言語学を論じたもの。著名な言語学者たちについての回想を述べる部分はなかなか面白い。井筒俊彦、亀井孝、服部四郎、村山七郎などについて、敬意とも揶揄ともつかない思い出話が続く。

村山七郎氏について、田中氏が「村山さんの方言は茨城の方言でしょう。でもその発音はまるでダニエル・ジョーンズの基本母音をそのまま再生したような口の動きをされる日本語でした。日本語をまるで外国語のようにお話しになる。」と述べている部分を読んで、私自身も村山先生の授業を受けた折に、同様の感想を抱いたことを思い出した。それどころか、助詞の「を」を確か[vo]と発音されていた。自然にというより、確信犯的に、そういう発音をなさっていた。田中氏がかつてドイツに留学する際に、村山先生にドイツ語の書類を代書してもらった由。確かに村山先生はドイツ語が得意で、授業での雑談で、今度コレコレのテーマで論文を書こうと思っているが、英語を書くのは少ししんどいので、ドイツ語で書くことになるだろう、とおっしゃっていたことを思い出す。(もっとも「しんどい」というのはあくまでも「ドイツ語に比べたら」ということだろう)

田中氏も、鈴木氏も、相当の種類 of 言語の知識を有しているから、話題はさまざまな言語を縦横にめぐって、なかなか楽しい。先人に対する容赦ない評価には辟易するけれども、過去半世紀の言語学のいろいろな潮流がよく分かる。立場のまったく違う二人の対談がこれほど上手く運んだのは、二人とも老境に達したからだろうか。

(2008/07/12)

『漢字伝来』

大島正二著『漢字伝来』(岩波新書、2006年8月18日発行)。漢字の概説書。タイトルにあるように日本への漢字の伝来を主たるテーマとしてはいるが、それに止まらず、漢字をめぐる広範囲な情報が詰め込まれている。著者は音韻学の専門家として知られるが、本書では音韻の話は最後に付録(?)として添えら

れるのみである。朝鮮半島を通じての漢字文化受容から、訓読み・訓点の発達など、知っておくべき事柄が手際よくまとめられている。「百家姓蒙古文」(いわゆるパスパ字百家姓)の図版をなぜか「蒙古字韻」と説明しているといった些細な瑕疵はあるが、楽しめる本である。

(2007/10/25)

『話し言葉で読める「蘭学事始」』

長尾剛著『話し言葉で読める「蘭学事始」』(PHP文庫、2006年12月18日発行、476円)。杉田玄白の『蘭学事始』の現代語訳であるが、楽しくかつ分かりやすく読めるように、かなりの自由訳になっている。江戸後期の蘭学について、まじめに知りたいという人には杉本つとむ訳・著の『知の冒険者たち——『蘭学事始』を読む』(八坂書房、1994年9月15日発行、2500円)を薦めるが、蘭学の世界をちょっとだけ覗きたいという向きには、本書の方が読みやすい。

冒頭部分を、原文、杉本訳、長尾訳の順で引用してみよう。

-----<原文>-----

今時世間に蘭学といふ事専ら行はれ、志を立つる人は篤く学び、無識なる者は漫りにこれを誇張す。

-----<杉本訳>-----

近ごろ、世間では、<蘭学>ということがしきりにはやっていて、ほんとうに志のある人は熱心にこれを学んでいるが、生半可な知識しかもたないものは、かえって知ったかぶってこれを誇張しているのである。

-----<長尾訳>-----

近ごろ----

マア、近ごろというのは、だいたいこの文化年間(1804-1818)ぐらいのことでありまして、徳川様が幕府を開かれてから二百年ほどといったところでありますが、世間では、いわゆる「蘭学」医療が、たいそうなブームとなっております。

蘭学とは、読んで字の如く「オランダの学問」ですな。つまりは、ヨーロッパで培われてきたさまざまな知識や技能でありますから、数十年までは我が国でご禁制であった。それが最近は、すっかり穏やかになって、多くの医者が学ぶようになっております。

しかし、色々な人間がいるもので、もちろんひたすらマジメに学んでいる者もあれば、中には、ただ目立ちたいばかりにブームに便乗しているだけで、浅はかな蘭学の知識を吹聴してまわっているヤカラもいる。そんな連中には、私も腹が立つ。私はすでに八十三歳という高齢ではあるが、そうそう“物解りのいい年寄り”というわけでもありません。

『蘭学事始』の現代語訳は数々あるが、上にご覧のとおり、長尾訳は解説を織り込んだ自由訳で、この書を初めて読む人にはこの上なく親切というか、お節介でさえあるが、個人的にはこういうものは嫌いではない。1時間もあれば通読できる文章でありながら、読み終えた後は、蘭学について、引いては近代日本の曙についての基礎知識が得られるようになっている。

山本周五郎の小説『赤ひげ診療譚』を読んだことのある人ならば、医長の「赤ひげ」について、「(赤ひげは)馬場穀里の門下で、鍛冶橋の宇田川榕庵は(赤ひげ)先生の後輩だということだ」という説明のあ

ることを記憶しているかも知れない。鞍里は長崎通詞の馬場千之助の号で、馬場の名は『蘭学事始』にも出てくるが、長尾訳ではその部分を省略している。宇田川榕庵は馬場門下で、『蘭学事始』にも詳しく述べられている宇田川玄真の養子である。山本周五郎がこの小説を書くにあたって『蘭学事始』を読んだことは間違いないだろう。ちなみに、『蘭学事始』ははじめ写本でのみ伝っていたが、明治2年に福沢諭吉の勧めと援助により出版された。

(2007/01/09)

古典ギリシア語

4月から古典ギリシア語を受講している。四半世紀ほど前、仏文の学生だった頃に一度授業を受けたことがあるが、テキストが **Greek for Beginners** という、英語の解説によるものだったことから挫折した。当時はフランス語に夢中だったので、英語を受け付けない体質になっていたようだ。今度のテキストは岩波全書の『ギリシア語入門』。古典ギリシア語の入門書としては、おそらくこれまでに最も使用されたものではないかと思うが、なにぶん練習問題の解答が付いていないので独習には向いていない。私はこの本を、1985年に古書店で400円で購入している。すぐに取り組んだが、一ヶ月ほどで挫折した記憶がある。独習者にとって解答がないというのは、ほぼ致命的と言ってよい。

今回の授業では、希文和訳問題を授業でやり、和文希訳は別に提出して添削してもらうことになっている。プロに教わることの恩恵をつくづく感じる。教えて下さっているのは、昨年中公新書で『ギリシア神話』を書いた先生だが、最初の授業で、「ギリシア語が現代に伝わったのは、ローマ人がギリシア語を評価したおかげ」と言ったのが印象的であった。確かに、ローマ人がギリシア語を尊ばなければ、ローマ帝国の準公用語にはならず、新約聖書がギリシア語で記されることもなかったかも知れない。

この年齢になると、動詞や名詞・形容詞の変化形を完全に覚えるのは、ほぼ不可能だが、今のところ他の若い学生よりはストレスを感じずにやっている。これはまあ、年の功というか、蓄積の量が違うから当たり前のことだ。その昔、フランス語やラテン語をやり、最近ドイツ語をある程度かじった経験から、種々の変化のパターンがおおむね予想の範囲内にある。英語以外に一つしかヨーロッパ語をやったことがなく、古典語が初めてという人たちに比べればかなり有利であろう。しかし、あと半年もすれば、その差もさほどなくなるかも知れない。

21世紀の日本で、古典ギリシア語をやるのが何の役に立つのかと問われれば、役には立たない、全くの個人的な趣味に過ぎないと答えざるを得ないが、池波正太郎や藤沢周平を読むのにも劣らない楽しみではある。

(2006/05/18)

『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑・モンゴル語配列対照語彙』

栗林均、呼日勒巴特尔編『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑・モンゴル語配列対照語彙』(東北大学東北アジア研究センター、2006年3月27日発行、非売品)。「清文鑑」は1708年に満洲語・満洲語辞典として編纂されて以来、モンゴル語や漢語などを順次追加して、最終的には『御製五体清文鑑』(1790年頃?)という5言語対照語彙集となる。本書はその第4次本である満洲語・モンゴル語・漢語の3言語対

照語彙集(1780年序)を、モンゴル文語のアルファベット順に配列し直したものである。3言語がそれぞれ3種の文字で表記されているのが特徴で、満洲語とモンゴル語の漢字表記にはそれぞれ通常の漢字音訳の他に「三合切音」という精密な音訳も記される。

モンゴル語の辞典は多くあるが、文語のアルファベット配列というのはほとんどない。本書はそれだけでもありがたいが、さらに、清代の満洲文字表記モンゴル語との対照が簡単にできるという点も非常に便利である。満洲文字表記モンゴル語は基本的に、モンゴル文語の当時の習慣による読みを記したものと見なしてよいだろう。同時期のハンゲル文字モンゴル語(蒙語老乞大などに見られる)と大きな違いはない。ただし、蒙語老乞大では<人>(文語kümün)を「kun」とするのに対して、本書の満洲文字では「kumun」とするなど全同ではない。

本書の満洲文字表記モンゴル語は、文語の読音であるとはいえ、口語の発音を反映すると思われる部分も見られる。まず、文語の「q」が、満洲文字の「h」で記されること。<字>(文語üsüg)が、「ujuk」であること。<大>(文語yeke)が「ike」であること。属格助詞(文語-yin)が「-yen」となること。鼻音の後の対格や属格、例えば<水の>(usun-u)などが、「usun nu」のように「n」を重ねること。以上である。本書を契機に、清代モンゴル語研究がもっと盛んになることを望みたい。

(2006/05/04)

『ラテン語の世界』

小林標著『ラテン語の世界』(中公新書、2006年2月25日発行、860円)。ラテン語史とラテン文学に関するエッセーないし雑学集であるが、非常に面白い。古拙ラテン語から中世ラテン語まで、様々な話題を取り上げている。

最古のラテン語資料についての話は、個人的に最も興味をおぼえた部分である。1871年に発見された黄金製の留め金に刻まれた銘文は、紀元前7世紀のものでされ、長い間最古のラテン語ということになっていたが、1970年代になってこの資料の真贋論争が起こった。今では贋作であるという説の方が多数派だという。しかしそこに刻まれた「MANIOS:MED:FHE:FHAKED:NUMASIOI」という文章は、贋作にしてはあまりにも言語学的な知識を要するものであるとのこと。古典期ラテン語に翻訳すれば「Manius me fecit Numerio(マニウスが私をヌメリウスのために作った)」と解釈されるこの文は、多くの点で古風なラテン語の特徴を持っている。とりわけ、/f/を「FH」で表記するのは、エトルリア語的慣習のなごりで、もしこれが贋作であるとすれば、相当に手が込んでることになる。

ラテン語関連の書物は、最近1年か2年に1冊ぐらいの割で、出るようになった。学習者が増えているとは思えないが、なぜか出版社も喜んで(?)上梓するようで、ありがたいことである。名古屋の朝日カルチャーセンターでは国原吉之助大先生のラテン語講座が開かれているようで、これも慶賀に堪えない。ラテン語バンザイ!

(2006/03/13)

『ヴォイニッチ写本の謎』

ゲリー・ケネディ、ロブ・チャーチル共著『ヴォイニッチ写本の謎』(松田和也訳、青土社、2006年1月25

日発行)。中世ヨーロッパ写本である「ヴォイニッチ写本」をめぐる様々な謎について綴った書。奇想天外な図象と、全く読めない不思議な文字からなり、20世紀初に突如発見された中世の写本。多くの研究者や好事家が、その解読に挑みながら、今なお読み解かれることを阻み続ける写本。初期にはロジャー・ベーコンの書であると言われ、最近では、著者不明の人工言語であるという説が有力視されている。ヨーロッパのいずれかの言語を表すと考えるには、あまりにも語彙と文法のパターンが単純であるという。

リトアニア生まれでロンドンに渡り古籍商になったヴォイニッチが、南ヨーロッパで200頁以上もあるヴェラム写本を発見したのは1912年のこと。その後、彼はこの写本を高く売るために、内容の解読を研究者に依頼する。研究者はベーコンの手になる書であると発表するが、そのあまりにも複雑な解読手法に、彼の死後、疑念が噴出する。

一般に、文字の解読は、それがどのような言語を表しているかを予想できなければ、困難である。少なくとも、どの言語に近いかという情報が必須である。ヴォイニッチ写本は中世ヨーロッパ写本であるというから、ラテン語を記していると考えるのが最も自然であるが、ラテン語として読めないとすると、ほぼ絶望的になる。素人でも一瞥して気付く特徴は、同じ語の繰り返しが多いこと、定冠詞が見あたらないことである。やはり一種の人工言語、あるいはデタラメということになるだろうか。仮にこの写本がデタラメな文章を綴ったものだった場合、何のために、という大いなる謎が残る。

膨大な頁を、意味のない文章で埋めるというのは大変なことである。しかし、この種の無駄な(と見える)仕事には、時折遭遇することがある。例えば、現在パリの国立図書館に所蔵される中国清代の写本で、『三国演義』を満洲文字で記したのがある。これが満洲語訳であるならば、十分に意味のあるものであろうが、この写本は満洲文字で中国語を記している。つまり、カタカナで中国語の発音を記すように、ひたすら膨大な分量の『三国演義』の中国語の発音を満洲文字で記しているのである。一体何のためにこのようなものが必要なのであろうか。満洲語の練習ならば、満洲語を記すべきであろうし、中国語の発音練習ならば、せめて漢字と一緒に記さなければ、効果はないだろう。実際、この写本は現在知られているいずれの『三国演義』の版本とも一致しないのであり、解読にもかなり骨が折れる代物である。このように、何のために作られたか分からない写本が実在するわけであるから、ヴォイニッチ写本のような、もしかしたらデタラメかも知れない写本が存在してもいいのかも知れない。

(2006/02/24)

「インチキ・ヒエログリフ」

正月に帰省した帰り、新幹線での暇つぶしにと、近藤二郎著『ヒエログリフを愉しむ』(集英社新書、2004年8月22日発行、720円)を購入して読んだ。著者の体験談などを中心にした随筆であるが、その中に「インチキ・ヒエログリフ」という一章がある。デタラメなヒエログリフの銘文を刻んだ木棺の写真が掲げられている。真贋の判断を求められれば即刻に贋作とされそうな代物だが、実際にはエジプトのサッカーラ遺跡からイギリスの調査隊によって発掘された、正真正銘の古代エジプトの棺だという。発掘者のマーチン教授自身が「もし古物商が、この種のヒエログリフもどきの銘文をもつ出土地もわからない棺の蓋を持参したなら、現代の贋作として引き取らないだろう」というほどの代物である。

このような遺物は、考古学の立場からはそれなりに価値のあるものかも知れないが、文字を研究する立場から言えば、やはり贋作と同一の扱いをせざるを得ないだろう。18世紀に中国西域で作られたコインなどにも、文字だけみれば贋作としか見えない満洲文字を記したものが多くある。これなどもアラビア文字や漢字と共に記されていなければ、即刻贋作と断じられそうな代物であり、少なくとも満洲文字研究

の立場からは、よほど特殊な場合を除き、資料的な価値は低い。

ただし、資料的な価値がないからといって、重要でないということにはならない。現代の贋作も含め、怪しげな資料についての知識を持つておくことは、真に価値のある資料を価値のあるものとして扱うために必要である。

(2006/01/09)

朝鮮語の学習

約20年ぶりに朝鮮語を学習している。テキストの秀逸さに加えて、担当の先生が素晴らしいため、非常に充実した授業になっている。テキストは普通の書店では販売していない自費出版(?)で、飯田秀敏&イ・ウナ著『一楽しく確実に一韓国語を学ぼう 合本版』(2004.4.1発行)というものである。おそらく飯田氏の勤務校である名古屋大学で長年にわたって試用し、改訂を重ねたものではあるまいか。会話を中心とした8課構成で、文法説明と練習問題が豊富にあり、独習書としても十分に使える。担当の先生は30代半ばとおぼしき女性であるが、授業の進め方が上手く、熱心で、なにより朗らかである。相原茂氏のエッセー集『午後の中国語』に、語学教師は朗らかでなければならないと記されていたように記憶するが、彼女を見てまさにその通りだと実感した。

毎回宿題を課し、小テストを実施する。受講者はA4の紙を三角に折ったものに、自分の名前をハンゲルで書いて、先生に見えるように机の上に出しておく。先生はそれを見ながら次々と当てて、テキストを読ませたり、質問に答えさせたりする。本文の単語を覚えるために、表に日本語、裏にハンゲルが書かれた紙を掲げて、日本語を見てすぐに朝鮮語に訳す練習をする。みんなで輪になって、リズムを取りながら、順に数字を言ってゆく。間違った人は1分間スピーチを課せられる。

20年以上前には、朝鮮大学校の国語研究所の老先生から習った。非常に厳格な、言語学的な授業であった。文法はロシア語文法の用語で説明されることがあり、「これは造格です」などと平然とおっしゃる。また中国音韻学の用語も飛び出し、「昔は日母を表す字母がありました」などと、これも平然と言う。この先生の授業はいわゆる教養としての語学であり、今考えても贅沢な内容であった。当時は私自身も、語学学習には実用よりも知識を求めていたこともあり、その意味でもニーズにあっていたと言える。

外国語の学習には、英語教育における長年の論争に見られるように、実用と教養のいずれに力点をおくか、という問題がつきまとう。たっぷり時間をかけられる場合には、読み、書き、聞き、話す、の4技能にまず重点を置き、その後で、その言語の歴史や文化背景、あるいは細かな音韻や文法の問題に目を向けてゆくことになるだろう。しかし、週に1コマの授業ではその全てをこなせるはずもなく、教師は選択を迫られることになる。

現在受講している朝鮮語のクラスでは、受講者の大半が韓国ドラマをきっかけに学習を始めた人たちであるから、ニーズとしても実用的な部分が求められているわけだが、適正規模をはるかに超える人数に対して、しかも週に一度の授業で、片言ながらも1分間のスピーチを可能にしてしまう、これこそ現代の語学教師に求められる技術というものかも知れない。

(2005/10/16)

朝鮮語の学習(続)

毎週木曜日に朝鮮語を教えてくれる先生は30代(と私の目には映る)韓国人女性であるが、彼女の発音がとても興味深い。朝鮮語の発音それ自体もちろんだが、日本語の発音を聞いていても、かえって朝鮮語の音の特徴が浮き彫りになるようで、ワクワクしてしまう。

4月に「～です」という基本表現「～immida」を習った時のこと。「ハングルでは『-ipnita』と書きますが、発音は『-immida』です」という。続けて、「『ip』の『p』は『n』の影響を受けて、鼻音に変化して『m』になります」と、ここまではいい。「それではこの『im』の発音に注意しながら練習してみましょう」と言われた時には、思わず小躍りしそうになった。彼女自身は「『ip』の発音に注意」と言っているつもりなのである。「ip-no」と言おうとすると、自然に「p」が鼻音化して「im-no」と発音してしまう。日本語の中での発話であるにもかかわらず、自然にそうなることが、私には不思議でもあり、面白くもあった。

今月になって、動詞の活用がテーマになった。朝鮮語と日本語の動詞活用はよく似ているので、まず日本語の説明から入ったのだが、「連用形」という用語の彼女の発音がまた非常にウナラセルものであった。朝鮮語の音節末の鼻音は、音素としては /-m, -n, -ŋ/ の3種類がある。一方日本語の音節末鼻音は音素としては1種類しかない。仮に /-N/ としよう。「連用形」は日本語としては /reNjo:ke:/ ということになる。この /-N/ がなかなかくせ者で、ア行やヤ行の前では通常鼻母音化するわけである。ところが朝鮮語においては、「yönsüp(練習)」のように「s」の前に「-n」が来る時に鼻母音化することはあっても、母音や半母音の前で鼻母音化することはない。そこで日本語のヤ行の前での /-N/ が非常に難しい発音になる。我らが先生はどうやらア行・ヤ行の前の /-N/ を /-ŋ/ で発音することに決めているようであった。そこで問題の「連用形」は彼女によると [renŋjo:ke:] と発音されることになるのである。私は東の人間なので、彼女の発音は私の耳には「れんぎょーけー」のように聞こえる。西の人なら「れんにょーけー」と聞こえたはずである。

中国語を習い始めた頃、「天安門(Tian'an men)」の発音で「Tian」の「n」が鼻母音化していることに妙に感動した記憶がある。要するに日本人にはごく自然にできる発音「ティエンアンメン」なのだが、英語やスペイン語に慣れた耳からすると、「ティエンナンメン」と発音しないことが逆に新鮮だったのだ。多くの中国人にとっておそらく日本語の「連用形」はそれほど難しい発音ではないだろう。

話を朝鮮語にもどす。朝鮮語では母音と鼻音の後にくる「h」は弱化し、しばしば脱落する。この特徴は我らが先生の日本語の中にもよく見られ、そのことを彼女自身がよく理解している。「韓国語では語中の『h』は自然に母音化します。私が日本語を話す時にも、『h』がよく落ちますけど、それは自然にそうなるんです。」ギョッと抱きしめたくくなるような言葉ではないか。私などは英語を話している時、「v」を「b」に発音してしまっている自分に気づいて、話しながら落ち込んでしまうが、そんな細かいことを気にせず「自然にそうなるんです」と胸を張って言いたいものだ。

(2005/11/13)

『英語史入門』

橋本功『英語史入門』(慶應義塾大学出版会、2005.9.10発行、2400円)。こんな本を待っていた。他の英語史の本では消化不良になっていたような事柄が丁寧に説明されている。例えば、アルファベットの字形についての説明も詳しく、1611年の『欽定訳聖書』に用いられたアルファベットの字形表が載っていたり、『欽定訳聖書』やシェイクスピアの墓石拓本の写真を例に出して、ルーン文字thornがアルファベット

の「Y」と混同される様子を示している。統語法の変遷についての説明も詳しいが、この本の価値は何と言っても、「聖書」を基軸として英語史を捉えている点にある。これは著者が聖書研究の専門家であることによるが、英語史研究は聖書を無視しては成り立たないから、王道と言ってよかろう。『リンディスファーン福音書』と呼ばれるラテン語訳新約聖書の行間に、古英語による注釈が書き込まれている、といったようなことも、本書では通常の入門書よりかなり丁寧に説明される。英訳聖書が初めて印刷されたのが、英国ではなくドイツであったというのも驚きである。

ちなみに、最初はこの本を購入する予定はなかった。たまたまAmazonから1500円分のギフト券が送られてきたので、それを使い切るために、この本を選んだ。Amazonには感謝である。

(2005/11/04)

A Dictionary of Modern Written Arabic

Hans Wehr, *A Dictionary of Modern Written Arabic*, Otto Harrassowitz KG, 1994, 4th edition. 最もよく使われているアラビア語・英語辞典。見出し語と用例の多くにローマ字転写が施されているのが便利。日本で出ているアラビア語・日本語辞典には、おそらくローマ字転写の付されたものはない。このことは特に初学者には決定的に不便である。多くのアラビア語辞典にローマ字が付されない理由は、文字の翻字に徹するか、実際の発音を記すか、そして発音を記す場合、どのような発音を表示するか、それらを判断するのが容易ではないということであろう。文字の上では通常表れない、名詞や形容詞の格語尾をどのように記すか、あるいは記さないかという点も問題となる。本辞典のローマ字は、正則アラビア語の発音に基礎をおいた穏当な音韻表記を採用している。なお、表紙と背に記された書名は「Arabic-English dictionary」である。

(2005/10/29)

『日本語の森を歩いて』

フランス・ドルヌ+小林康夫著『日本語の森を歩いて--フランス語から見た日本語学』（講談社現代新書、2005.8.20発行、720円）。日仏対照言語学の立場から、日本語の諸問題を考えたもの。日本語と英語を比較したものはよくあるが、フランス語との対照研究はまだまだ少ない。本書はあくまでも言語研究であり、必要以上に文化論に傾かないように細心の注意を払っている。それでも文化論的な話題もあり、なかなか楽しめる。

主著者であるドルヌが、初めて日本語で研究発表をした時のこと。結論を述べて発表を終えたつもりが、何の反応もなかったという。原因は「以上です」の一言がなかったから。このような時にフランス語ではどう言うか、あるいは言わないか、なかなか他書では知る機会がない。

このほか、フランスでのトヨタ自動車の宣伝、「Une Toyota, ça s'essaie. (トヨタ車は、試せます!）」において、日本語の「は」による主題提示が、フランス語では不定冠詞「une」と中性代名詞「ça」の同格操作によって表現されているなどという指摘は非常に新鮮。

(2005/10/09)

ラシード・ウッディーン？

『集史』という名で知られる書がある。14世紀初にイル・ハン朝の宰相ラシード・ウッディーンによって書かれた、モンゴル史を中心とした世界史である。ラシードはユダヤ人の家に生まれたが、後にイスラムに改宗し、彼の進言によってイル・ハン朝もイスラム教を国教とするようになる。

問題は「ラシード・ウッディーン」という読みである。ユダヤの家庭に生まれ、おそらくはペルシャ語を母語とした彼の通り名がアラビア語風であることがまず問題を複雑にする。当時の彼自身による発音を再現するのは容易ではない。アラビア語として読むという原則に従うとしても、悩みはなかなか深い。アラビア文字の綴りはローマ字に翻字すると、{R-SH-Y-D A-L-D-Y-N}となる(「A」はアリフを表す)。あまり解釈を加えずに転写すれば、「Rashīd al-Dīn」である。欧米でもこのように綴られることが多い。では、日本語ではどう読むのか？よく見かけるのは「ラシード・ウッディーン」であるが、そのほかにも「ラシード・アッディーン」や「ラシード・アルディーン」などがある。これらは一体どのような方針に基づいているのか？

第1の方針として、「Rashīd al-Dīn」をそのままローマ字読みにするという方法があり得る。その場合、「ラシード・アルディーン」となる。実際の発音はともかく、もとの綴りを想起しやすいという利点がある。

第2の方針として、いわゆる正則アラビア語の発音に忠実に読む方法がある。その場合、「ラシードウッディーン」となるだろう。インターネットの百科事典「Wikipedia」の日本語版ではこの読みを採用している。アラビア語の定冠詞「al」は修飾語の中ではその母音が発音されないという規則がある。また、この「al」の「l」は後続の「d」に同化する。結果として「Rashīduddīn」のように読まれることになる。

第3として、折衷案というか中途半端な方法として、定冠詞「al」の母音はそのままにしておき、子音のみ「d」に同化させて「ラシード・アッディーン」という読む方法がある。これは直接には、欧米で時折見かける「Rashid ad-Din」という綴りを読んだのかも知れない。

一般に通行している「ラシード・ウッディーン」はどうか第2の方法をやや不正確に採用したものと考えられる。個人的には第1ないし第2の方針に従うのがよいと思うが、理論よりも習慣が勝つのが言葉の世界の常である。

(2005/10/05)

『英文の読み方』

行方昭夫『英文の読み方』(岩波新書、2007年5月22日発行)。最近はやりのペラペラ英会話とは正反対の方向を目指す、正統的(?)英文講読指南の書。受験生風に英文和訳をするとどうなるか、そして文脈を考慮に入れて深いところまで読むとどう訳せるか、さらには原著者の文体を考慮に入れると……という風に、最終的には翻訳指南までしてしまう。

江戸後期の蘭学に始まった、外国語をコツコツと読み込むという鍛錬、その精神が200年後の現代まで脈々と生き続けていることを痛切に感じさせる本である。かつてはどこの大学にも「英文学科」という名の英文読解の養成所があった。今では「英語学科」とか「国際コミュニケーション学科」と名を変えたところが多い。名は体を表すという。「文」のない外国語教育ははなはだ心許ない。

「とことんまで読み込む」という日本の伝統芸を絶やしてはならないのではないか。本書はそういうことを考えさせてくれる。

(2007/07/20)

『高校英語を5日間でやり直す本』

小池直己・佐藤誠司著『高校英語を5日間でやり直す本』(PHP文庫、2006年9月19日発行、571円)。この手のタイトルの本は退屈なものが多いが、本書はなかなか楽しく役に立つ。100項目のポイントを20項目ずつ5日間でこなす、というコンセプトだが、もちろん何日でやろうとかまわない。

最初の項目は「There構文」だが、挙げられている例文は、

There is little milk left in the refrigerator. (冷蔵庫には牛乳がほとんど残っていない)

というものだ。この例文を見たたん、本書を購入することを決めてしまった。「There構文」で単純に「There is + 名詞」という文が用いられることは実際にはあまり多くなく、例文のように過去分詞や現在分詞、あるいは関係節などを伴っていることが断然多い。そしてそのような構文はあまり丁寧に習わなかったりする。

ほかにも「seem to do」の形式で用いられる動詞は状態動詞に限られる、などということも説明されており、「He seems to go abroad.」が非文となる理由がよくわかる。ちっぽけな文庫本ではあるが、このような実践的な知識が楽しみながら得られるようになっている。昔、まじめに英語の勉強をやったのに文法の知識が少し曖昧になってきている社会人にお勧めである。

(2007/01/04)

The Holy Bible 1611 Edition

The Holy Bible 1611 Edition, Hendrickson Publishers, 2005 2nd printing. アマゾンにて購入。税込み3095円。言わずと知れた欽定訳聖書。King James Version とか Authorized Version と称されるものであるが、そのようなタイトルに安心して入手すると、実はオリジナルとはかなり異なるものであることが多い。つまり、大概は綴りが現代風に改められ、注釈が削除されている。その点、本書は書体をローマン体に直した以外は、オリジナルの体裁を保っており、ちょっとした調べものには重宝する。

例えば、「five years」は本書では「fiue yeeres」または「fiue yeres」の綴りで記されるが、後者はスペースが詰まった時に見られる綴りである。本当はこのような事でさえ、原本の写真版で確認すべきなのであるが、まあ次善の策として、本書で代用できるのである。どの言語であれ、400年前の綴りを気軽に確認できることの喜びは、文字と言語を愛する者にとって至上のものではあるまいか。

(2006/12/13)

The Sky Is Falling

Sidney Sheldon, *The Sky Is Falling*, Warner Books, 2001. シドニー・シェルダンの小説は軽すぎるとか中身がないなどと、何かと不評で、実際その通りなのだが、英語学習者にとってはなかなか貴重な作家である。とにかく読みやすい。英語多読愛好者の間で、この本が最初に挑戦すべきペーパー・バックの一つと位置づけられているのもうなずける。

主人公の女性が事件解決のために世界各地を飛び回るので、独・仏・伊・露の各言語が随所に出てくる。また、11歳の子供が話す若者言葉も勉強になる。「word」が「yes」の意味で、「rad」は「excellent」の意

味だ。後者は「radical」の省略形に由来するらしい。ほかに、「phat」という言葉が「かっこいい、セクシー」などの意味で使われていることは知っていたが、シェルダンによれば、その語源は「pretty hot and tempting」の頭文字を取ったものだという。リーダーズ英和の「pretty hips and things」よりも解釈としては面白い。CODによれば、この語は70年代に用いられ始めたが、語源不明とのこと。

この作品以外にシェルダンを読むことはもうないと思うが、個人的には結構楽しめた。彼の英語は我々非ネイティブが文章を書く際のお手本と言っても良いのではないか。簡潔にして明瞭。複雑な構文もなければ、難解な語彙もない。それがベストセラー作家たり得る秘訣なのかも知れない。

(2006/08/26)

『多聴多読マガジン』創刊号

『多聴多読マガジン』創刊号(コスモピア、季刊、1380円)。新しい英語雑誌が出たので、立ち読みしてみた。私自身も一時期夢中になった英語100万語多読のコンセプトと、音声教材を合体させた雑誌である。Graded Readers(語彙レベルを段階的に調整した英語学習者用の薄いペーパーバック。英国の複数の出版社から出ている)のサンプルが数ページずつ載せてあり、さらに簡単なニュースと映画スター(今回はキアヌ・リーブスとサンドラ・ブロック)のインタビューがある。CD付き。

今回紹介されているものの中では、何と言っても *White Death* がお勧め。多読愛好者の間では非常に評判の高い作品だ。作者の Tim Vicary は日本の多読愛好者に最も好まれている作家と言ってもよい。100万語多読って何?と言う人は、SSSのHPを参照して下さい。

100万語多読をまだ経験したことがなくて、しかもラクをして英語が読めるようになりたいと漠然と思っている人は、とりあえずこの雑誌を手にとってみてはいかがだろうか。正しい手順で取り組めば、1年以内に通常のペーパーバックを楽しめるようになる。(ただし日本語の小説さえほとんど読まないという人には向かない。当然ながら。)

(2006/09/07)

古英語の初歩

夏は何か挑戦する季節、ということで、古英語に取り組んでみた。使用している参考書は次の2冊。

■市河三喜・松浪有著『古英語・中英語初歩』(研究社、1986)

■近藤健二・藤原保明著『古英語の初歩』(英潮社、1993)

いずれも一長一短というか、帯に短し襷に長しというか…。例えば、前者の読本の部の最初にあげられているのはマタイの福音書の一節であるが、次のような文で始まる。

Fæder ure, þū þe eart on heofonum, sīe dīn nama gehālgod.

全体の意味はおそらく、「天にいる我らの父よ、あなたの名が聖なるものになりますように。」ということであろう。最初の単語は現代語の「father」、その次は「our」であるが、その「ure」について「強変化形容詞男性主格形」と注がある。いわゆる所有代名詞は形容詞と同じ変化をする。しかし、該当箇所の変化表には主格で「-e」語尾を取る形容詞があげられていないため、この本だけでは「ure」が実際にはどのように格変化をするのかわからないのである。一方、後者の近藤・藤原(1993)では強変化の形容詞には無

語尾のもの他に、「-e」語尾や「-u」語尾の例も挙げてあり、親切である。しかしまた、近藤・藤原(1993)では75頁に上と同じ例文が挙げられているが、そこでは「sīe」(bēon [= be動詞]の仮定法現在)とあるべき箇所が「sī」となっている。ここは「仮定法」という項目の下に挙げられた例文でありながら、肝心の仮定法の形が活用表と違っているのである。

市河・松浪(1986)は読本の部の全ての文章に現代英語訳が付されているのが便利であるが、文法の説明は簡略に過ぎる。一方、近藤・藤原(1993)は文法説明はやや詳しいが、上述のように初学者には意味不明な語形があるのと、読本の部に現代英語訳がないのが初学者にはややつらい。どのみち、もう少し本気でやるには、欧米で出ているまともな辞書と文法書が必要になりそうだ。

(2006/08/12)

Kay & Jeff

『NHKラジオ英会話レッツスピーク』2月号のテキストに、特別企画としてケイ・ヘザリ(Kay Hetherly)とジェフリー・クラーク(Jeffrey Clark)の対談が載っていた。ラジオ英語講座のファンならおなじみの2人だ。大杉正明氏がラジオ英会話を担当していた頃、時期は異なるが2人ともゲストとして出演していた。ジェフの方はマーシャ・クラッカワー女史のラジオ英会話でもゲストとして出ている。

2人とも長年日本に住んでいて、全く日本に馴染んでしまっていたが、ジェフは一昨年アメリカに帰り、ケイは去年2ヶ月ほどテキサスに里帰りした。久しぶりにアメリカに戻って、あらためて日本らしさとアメリカらしさに気づいたという。アメリカにもどってなかなか馴染めなかったことは？というケイの質問にジェフは、「アメリカではどんなことでも単刀直入に言わなきゃならないってことだな。日本人の友人たちは、僕の声から、僕がどんな気持ちなのか理解してくれるんだけど」と答えている。一方、ケイの方は、日本ではハグの習慣から離れていたのだから、戻ってみると、記憶よりもずっと頻繁にハグしているのに驚いたという。

ケイの指摘で興味深かったのは、東京にいる欧米人はお互いのことを無視するのが得意だ、という点だ。テキサスではみんなが微笑みかけたり、目を合わせたりする、と。してみると、日本のガイジンさんたちも予想以上に日本風的生活習慣に染まっているということなのだろう。

この2人のように、日本をよく知っている人たちによって、英語番組は支えられているのだなあ、とある種の感慨にふけてしまった。

(2006/02/03)

Painted Labyrinth

Michelle P. Brown (2004), *Painted Labyrinth --The World of the Lindisfarne Gospels*, revised edition, London: The British Library. 最近「リンディスファーン福音書」に興味を持ちました。聖書のラテン語本文の行間に古英語の書込がある写本はいくつか知られているが、「リンディスファーン写本」は10世紀の筆写と考えられており、最も古いものようである。本書にはその一部分の写真が含まれている。期待したほど中身の写真部分は多くはないが、それでもイギリスの至宝ともいわれるこの写本をカラー写真で眺めるのは楽しい。

古英語の写本に興味をもつきっかけは、縮約字であった。1611年に出版された『欽定訳聖書』には

「y」の上に小さな「e」や「t」を付して、それぞれ「the」や「that」を意味する表記法がある。現在「th」で表記されるものを古英語ではルーン文字に由来する「þ」（「thorn」と呼ばれる）で表記していたのだが、11世紀以降「th」が確立してくると、「þ」は徐々に用いられなくなった。しかしこの文字に（写本の）字形が似ていた「y」が、古風な雰囲気を出すためにしばしば「þ」の代用字として用いられるようになったものらしい。しからば「þ」の上に「e」や「t」を添える表記法はいつからあったのかというのが、古英語の写本に興味を抱いたそもそもの始まりである。

スペースの省略のために（あるいは筆写の労力節約のために）縮約字を用いる習慣は古くからあるようで、中世のラテン語写本に広く見られる。最もよく知られているのは母音の上に「ー」や「〜」などを記して後続の「m」や「n」を省略する、いわゆるティルデ記号であろう。その他にも「agi」の「g」の上に「ー」を記して、「augusti」を表すような過激な(?)ものまで、多種多様な縮約字がある。

「リンディスファーン福音書」のようにラテン語と古英語が同時に記されるものには、双方に共通の縮約字（ないし縮約法）が見られるのではないかと、とういのが当初の予想であった。しかし、聖書のような神聖なものには、そもそも縮約字はあまり用いられないようである。

いずれにしても、『欽定訳聖書』にどうして「y+t→that」のような縮約字が用いられたのか、という問題はなかなか面白い。15世紀にヨーロッパで印刷術が生まれた当初、多くの縮約字が活字としても作られたのは、もともとなった写本を忠実に再現するための努力であったはずである。しかし、すでに印刷の時代になってから作られた『欽定訳聖書』には基づく古写本はなかったはずであるから、「y+t」に関しては、わざわざその表記を選んだことになる。「þ」と「y」の混同と、縮約という写本時代の習慣とが不思議な形で結合したこの表記法は、文字文化を考える上で非常に興味を引くのである。

(2005/12/04)

『清代満洲語文法書三種』

竹越孝編訳『清代満洲語文法書三種』（古代文字資料館『KOTONOHA』単刊No.1、2007年8月31日発行、非売品）。『清書指南・翻清虚字講約』（1682年）、『満漢類書・字尾類』（1700年）、『満漢字清文啓蒙・清文助語虚字』（1730年）の三種について、全文を翻字し、かつ満洲語部分の日本語訳を付した資料。清代の中国人が満洲語の複雑な文法体系をどのように理解したかを知る恰好の書である。

テンス・アスペクトの理解に「未然」「已然」「将然」などの用語を用いる点が興味を引く。日本語の動詞活用を命名分類したのは東条義門（1786～1843）であるが、彼の『友鏡』（1823刊）、『和語説略図』（1833刊）、『活語指南』（1844刊）などに、「将然言（＝未然形）」「已然言（＝已然形）」などの用語が用いられた。果たして満洲語文法書との関連やいかに。

本書は非売品だが、誰でも入手は可能。入手方法については古代文字資料館のウェブサイト参照。

(2007/09/04)

『荻野のイッキに古典文法』

荻野文子『荻野のイッキに古典文法』（栄光、2003年4月5日初版発行）。いわゆる受験参考書である。著者はこの世界では「マドンナ」というニックネームで有名な予備校講師ならびに塾経営者であるが、本

書は珍しくそのニックネームを冠さず「荻野の～」という書名になっている。古典文法の参考書は無数にあるが、本書ほど分かりやすいものはない。助動詞や助詞の「識別」という一点に的をしぼった文法講座なのである。例えば、「咲きぬ」の「ぬ」は打ち消しの助動詞か、完了の助動詞か、というような識別を丁寧に説明している。識別の問題こそが受験における要というわけだが、趣味として古文を楽しむものにとっても、やはり識別問題は避けては通れない。「～なむ」などになると、願望の助動詞、確述用法など4種類の用法を識別しなくてはならないのだ。

マドンナこと荻野女史は上智大学の国文科でマジメに古典を勉強した人だが、学者先生と違って、あくまでも古文を楽しむという姿勢に徹している点が人気の秘訣であろう。例えば完了の助動詞「り」は、サ行変格活用動詞の未然形（「せり」）と四段活用動詞の已然形（「咲けり」）に接続するが、偉い先生だと、実は四段の已然形ではなく命令形に付くのだ、などとウダウダ講釈を垂れてしまうところだ。マドンナ先生は、命令形に接続するという説もあるが、識別には影響なし、とアッサリとかわしている。奈良時代の万葉仮名で已然形と命令形に表記上の区別があり、完了の「り」が命令形接続であることが分かる、などという議論を受験生にするのは余計なお節介というものだろう。

本書を片手に、実際の古典作品を（もちろん文法解説付きの受験参考書で）読むのも、大人の趣味としてはなかなかよいのではあるまいか。

(2007/07/02)

『シュメル---人類最古の文明』

小林登志子著『シュメル--人類最古の文明』（中公新書、2005.10.25発行、940円）。シュメル文明の概説書。「すめらみこと」が「シュメルのみこと」であるという俗説が横行した時代に、そのような混同を避けるために「シュメール」という表記が生まれ、長らく一般化していたが、本書では本来の表記に戻している。シュメル文明に関しては、これまで眉唾ものの書籍が何冊かあっただけで、きちんとした概説書がなかった。やっと専門家による記述が得られたのは本当に嬉しい。

「はじめに」では、昨年のアテネオリンピックのイラク選手団のことが記されている。先頭に立った女性の服装が、なんと「ウル王墓」から出土した髪飾りを模した飾りをかぶり、服には楔形文字があしらわれていたという。シュメル文明という最古の文明がイラクの誇りであることを端的に示すエピソードである。またこの「はじめに」では、本書が「粘土板読み」と呼ばれる現代の研究者の成果に基づいていることを明記している。本書の記述が信頼できる所以である。

かつて同じ中公新書で杉勇著『楔形文字入門』という名著があったが、絶版になって久しい。最新の成果を取り入れた新たな「楔形文字入門」が現れることを願ってやまない。

(2005/11/25)

* 杉勇著『楔形文字入門』はその後講談社学術文庫から復刻された。(2011/9/13補)

『まんがパレスチナ問題』

山井教雄著『まんがパレスチナ問題』(講談社現代新書、2005.1.20発行、740円)。知人に英語多読用の本を100冊ほど貸したら、お礼にということで図書券をもらったので、本書を購入。タイトルから想像されるほど漫画が中心の構成ではない。普通の本よりは挿絵がだいぶ多いという程度。それでも読みやすいことに違いはなく、ユダヤ人とパレスチナ人の歴史を一通り知る助けになる。

そもそもユダヤ人とかパレスチナ人の定義は一体何なのか、が前から気になっていた。本書によれば、ユダヤ人は宗教的にユダヤ教徒であるかユダヤ人の母を持つ人で、パレスチナ人は地理的にパレスチナに住んでいた(いる)人かパレスチナ人を父に持つ人、そしてアラブ人とは言語的にアラビア語を母語とする人、ということらしい。本書に登場するキャラクターであるエルサレムの猫のセリフを借りれば、「民族の概念なんていいかげんなものだから、上の定義に従えば、ユダヤ人で、アラブ人で、かつパレスチナ人でもある……なんて人が出てくる。」ということだ。

本書の登場人物は、ユダヤ人の少年ニッシムと、パレスチナ人の少年アリ、そしてエルサレムの由緒ある(?)のら猫、の2人と1匹。旧約聖書の時代から21世紀まで、複雑な問題を時にほのぼのとした感じで語っている。

(2005/11/19)

Au Konbini

毎週木曜の夜に「拝啓、父上様」という倉本聰脚本のドラマをやっている。主演は一昨年「優しい時間」でも倉本ドラマに出ていた、最近売出し中の二宮和也だ。彼が一目惚れする女性がちょっと変わっている。黒木メイサ扮するこの娘は、フランス語しか話さない。フランスに行ってパティシエの修行をしようと、まじめにフランス語を勉強しており、月水金はフランス語しか話しないと決めているのだ。落としたリンゴを拾ってあげた二宮が「どこに行くの?」と尋ねると、彼女は「Au Konbini là-bas. (あそこのコンビニ)」と答える。もちろん二宮はフランス語を解さないが、指した方向にコンビニがあるので、「ああ、コンビニ」ということになる。

日本にいる外国人の間では「Konbini」は英語としてもフランス語としても通じるようだ。フランス語だと男性名詞なのかと、このドラマで確認した次第。もっとも、大抵の新語は男性名詞だから、予想通りではあるのだけれど。黒木のフランス語の発音は、まるで「おコンビニ」と、「コンビニ」を丁寧に言ったのかと思っただが、まあまあ頑張っている。ドラマの中の日本人による外国語のセリフは、赤面するようなものが多いが、黒木の発音は、フランス語科の2年生ぐらいのレベルはある。母音の[u]と、「je(私)」の子音がちゃんと出来れば、もっとフランス語らしくなるはず。

そう言えば、テレビ東京系列で今週2夜にわたって李香蘭の人生を描いたドラマをやっていた。主演の上戸彩が頑張って中国語を話していて、普通だったらよくやったと褒めたいところだが、日本人だと信じてもらえず、死刑になりかけたほど完璧な中国語を話した李香蘭を演じるには、少し切ないものがあった。「私が日本人だって気づいてた?」と友人に聞く場面では、思わず、その中国語じゃバレるよ、とツッコミを入れたくなった。発音は中国語科の3年生程度というところか。ただ中国語科の3年生がどの程度かとか聞かれると答えにくいのだが。でも歌は李香蘭に負けていなかった。「蘇州夜曲」はジンときた。

最近の役者は辛い。英語だけでなく、フランス語や中国語もやらされる。そう言えば、少し前のドラマ「輪舞曲(ロンド)」で韓国語を話す役だった橋爪功は、「李香蘭」では中国語教師役で中国語を話すは

めになっていた。どちらも努力賞という感じだったが、あの年で外国語のセリフを覚えるのは、さぞかし大変だろう。日本人俳優の外国語としてピカイチなのは、長塚京三のフランス語。ソルボンヌ大学で学んだという経歴に嘘偽りないことが、その発音を聞いただけで納得できるほどだ。逆に、一番情けなかったのは、寅さんシリーズの一編で竹下景子が話したドイツ語。あれほどの才媛にして、あのドイツ語はなあ…。役者の皆様、ご苦労様です。

(2007/02/13)

『中国文明の歴史』

岡田英弘著『中国文明の歴史』(講談社現代新書、2004年12月10日発行、740円)。1983年に『民族の世界史5 漢民族と中国社会』(橋本萬太郎編、山川出版社)の中の一章として書かれたものを、増補改訂したもの。「中国」という概念がいかんにして作られたかを、諸民族の対立と統合から説く。古来の中華思想的中国観を粉砕する、かなりアクの強い概説書と言える。しかし、少し前までの中国史が必要以上に、「漢族」の歴史であることにこだわっていたことを思えば、北方の諸民族が「中国」の形成に果たした役割を積極的に評価する歴史観には胸のすくような心地よさがある。

とは言え、アクの強さは相当のものである。時には、こんなことまで書いてしまって大丈夫？と読みながら、ハラハラする部分もある。岡田氏によれば、184年の黄巾の乱を境に、「中国人」と「中国語」が変質するという。中国語はもともとタイ系の言語を基層として、それにアルタイ系やチベット・ビルマ系の言語が影響して出来たものであるが、黄巾の乱以後、南北朝の時代を通じて、華北の支配者はすべてアルタイ系もしくはチベット系になった。そこで、それまで師から弟子へと伝えられていた漢字とその読み方の知識は、記録によって守られることになり、「反切」と「韻書」が考案されたという。

その説の是非はにわかに判断しかねるが、「中国語」という概念を組み立て直すヒントになることは間違いない。

(2006/02/17)